

十三文半の末路

「今、名古屋から札幌に来ているんですが、お目にかかれませんか」突然女性から電話があった。名古屋に知人はいない。

「はて？」と返事をためらっていると、実は私が以前に出したエッセイ集(新旧の札幌の写真と一緒にのもの)を読んで、その話を聞きたいのだという。札幌に関する本に遠い名古屋の人が関心を持ってくれるのは、けっこう嬉しいことだ。早速会うことにした。

女性は名古屋にある短大の准教授、といっても柔かな印象の人だった。関心はもっぱら昭和二十三年頃の北十八条、市電幌北線の終点あたりのことだ。昭和二十三年といえば戦争が終わってまだ数年、街は混乱の最中だった。私も中学生。調査している先生はまだ生まれていない頃のことだ。

実はこの先生、アメリカの大学の知人の依頼を受けて、その頃、札幌に進駐していたあるアメリカ兵士の足跡を尋ねているのだという。この兵士は殺人犯である。この年北大の構内で二人の学生がこの男に殺された。一人は射殺、一人は撲殺であり、ほかに何人かがケガをしている。男は西十一丁目の通称“魔の踏切り”から北大構内を北十八条まで歩き、途中でこの事件をおこしているのだそうだ。

それで思い出した。前年の昭和二十二年には、大通り公園や豊平河畔で市民が殺傷される事件があいついだ。犯人は占領軍兵士という事はわかっていた。然し新聞であからさまに書く事は命令で許されなかった。だから、記事では足跡が十三文半の大男の犯行と書いてあった。十三文半とは三十センチに近い大足ということだろう。占領当初の軍隊は比較的紳士的で、市民も一応ほっとしていたのだが、隊が交替してから急に粗暴な兵が増えたのだった。北大の事件はその翌年。犯人は北十八条あたりで、日本人女性と同棲しており、その女のために日本の金が欲しかったらしい。兵士はつかまって軍事裁判で死刑を宣告された。だがアメリカ先住民族の血が流れていたせいも、大統領によって恩赦になり居留地に帰ったが、結局は女性トラブルで射殺されてしまったという。